2020年
12月11日
金曜日

コロナ危機の2020年

井口　泰　教授（労働経済学）

エレミア書第27章2節「主は、私にこう言われた。あなたは、縄とかせとをつくり、それをあなたの首に付けよ」（新改訳版）

2020年、新型コロナ・ウイルスの感染拡大と経済危機の深刻化で、私たちは、願っていたこと、希望していたこと、計画したことの多くを、実現できませんでした。

これを「敗北」と評価されても、仕方ないかもしれません。仮に、それが「敗北」であったとしても、この間、私たちは多くを学び、予想できないことに挑戦したではありませんか。皆さんと、その家族や友達が、この危機の中、健康を維持し、生活を支えられたなら、これは「敗北」ではなく、「勝利」だったのではありませんか。

また「危機」という言葉は、古代ギリシャ語に語源を見出せます。その意味は、「方向転換」又は「決断」とも解釈できます。「危機」の2020年は、人類の歴史における大きな分水嶺のような転換の年であった可能性があります。

この1年、私たちはウイルス感染のリスクと戦いました。このウイルスの正体は、依然として良く判らず、どうしたら共存できるのか判りません。しかし、遺伝子解析のデータが世界で共有され、異例の速さでワクチン開発は進んでいます。

私たちは、医療の直面する危機を肌で感じるようになりました。それだけでなく、感染リスクに曝されやすい人たちの存在を理解するようになれたのではないでしょうか。

ただ、感染防止のために広報された「社会的距離」（social distancing）という言葉には、多くの懸念があります。感染防止のため、人と人の「物理的距離（physical distancing）」を確保する必要性や、感染防止のための技術革新の必要性は理解できます。しかし、人と人の「横のつながり」を希薄化して孤立化の危険が高まり、感染リスクが偏見や差別を助長し、自殺を増加させる懸念もあります。弱い人たちを攻撃する乱暴な言葉がネット上で拡散することには、同意できません。

欧米諸国だけでなく、日本でも第三波の感染が拡大し、再度の「緊急事態宣言」で、経済的困窮に陥る事態が私たちの身近に迫っています。

本日読んだエレミア書では、古代イスラエルの人々が、自ら招いた危機と運命を理解していませんでした。預言者エレミアは、自分の首に縄とかせ（後には鉄のかせ）を背負い、王と民衆に警告を発します。ところがハナンヤという別の預言者があらわれ、心地よい未来を語って人々の熱狂を誘います。あたかも、現代の欧米諸国で広がるポピュリスト（大衆迎合主義）の政治家を連想させます。

感染症は、決して単なる自然現象ではありません。特に20世紀後半以降、世界的規模での森林伐採、動物の殺害や種の消滅が日常化しました。宿主となる動物のなかで平和的に生存していた細菌やウイルスが宿主を失い、人間に感染しやすくなっています。さらに、感染は、国境を超える人の移動によって拡散されてきたのです。

その意味で、パンデミックは地球温暖化と同じく、人類が自ら招いた災いです。各国は、短期的には都市封鎖（ロックダウン）で危機を終息させようとし、長期的に、公衆衛生及び医療インフラを築いてきました。感染防止と経済再生の「トレード・オフ」は、デジタル化だけでは克服できません。元の時代に戻る発想では、持続性ある世界は実現できません。若い世代には、是非、知恵と勇気で、社会的なイノベーションを実現してください。■